

「産まない」ことを願う石の習俗

—近代における産育習俗を中心に—

宋 丹丹

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

要 旨

本稿は、安産以外の墮胎、間引き、避妊などの産育習俗において、用いられる石の特徴、石の働き、石の呪術性などについて考察し、石に託された民俗の心意を明らかにすることを目的とする。

これまでの民俗学の研究では、子授けや安産などを願う石の習俗について早くから報告がなされ、研究が蓄積されてきた。一方、避妊、墮胎などの「出生コントロール」や間引きに関する石の習俗については、研究がほとんどなされてこなかった。そこで本稿では、民俗学に限らず、近世史における墮胎、間引きなどの研究を参照し、筆者がこれまで研究を進めてきた石や岩石信仰との関わりから、石を用いた避妊、墮胎、間引きなどの習俗について検討していく。

分析の対象とするのは、『日本産育習俗資料集成』、『岡山縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』、『愛知縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』などの資料である。墮胎、間引きと避妊の実施方法や特徴、また石を用いたかどうかなどを分析の指標とした。結果は、以下に示す通りである。

まず石を用いた墮胎と間引きの習俗は、石の呪術性よりも、モノとしての石の重量、堅固という石の物理的な性質を利用していたことがわかった。墮胎の具体的な方法として、石を用いたものはわずかであるが、たとえば石を抱いて高いところから飛び降りる、漬け物石を持って動き廻る、などが挙げられる。間引きの習俗の場合も、石の物理的な性質を利用し、とくに神聖視される場合もある石臼を用いて嬰兒を殺す方法などが見られた。

また、妊娠を避ける習俗では、石の持つ霊性または神性を基に、投げるまたは腰掛けるという行為を加えて祈願していたことが明らかとなった。その際、人に見られないように、また、後ろ向きになる、といった日常的な祈願の行為とは意識的に逆の行為を行って避妊の達成を願っていたことがわかった。

墮胎や避妊などの「産まない」こと、「妊娠しない」こと、また間引きという嬰兒殺しのなかで、石を用いて子殺しをしたり、石ではないがホオズキの茎を性器に入れるなど、危険な方法で墮胎せざるを得なかった当時の女性たちの性や生が『日本産育習俗資料集成』という断片的な資料の中からも浮かび上がってくる。つまり、石を用いた／石を用いない「出生コントロール」を行う女性たちの切実な願いと現実、そして産まない、産めない女性を石を用いて「石女(うまずめ)」と表現した当時の人々の眼差しも、石に注目することで、明らかにすることができたと言える。

キーワード：妊娠・出産、出生コントロール、産育習俗、安産祈願、石の信仰、心性、近代

Stone-based Customs of Prayer to Avoid Childbirth:

With a Focus on Childbearing Customs in the Modern Era

SONG Dandan

Department of Japanese Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

The purpose of this paper is to examine the characteristics of the stones used in childbearing practices for purposes other than safe childbirth, such as abortion, infanticide, and contraception and the functions and magical properties of stones and to clarify folk beliefs entrusted to stones.

There are earlier reports of folklore studies on the custom of using stones to pray for fertility and easy childbirth, and studies on the subject have been accumulated. On the other hand, research has not been conducted extensively on stone-based customs related to birth control, such as contraception, abortion, and infanticide.

The author conducted studies on abortion and infanticide not only in folklore but also in early modern history and examined stone-based birth control, abortion, and infanticide customs in relation to stone and rock beliefs, which the author has been researching.

Based on the materials such as *Nihon saniku shūzoku shiryō shūsei*, *Okayama kenka ninsin shusan ikuji siryo*, and *Aichi kenka ninsin shusan ikuji siryo*, the methods and characteristics of abortion, infanticide, and contraception, as well as whether or not stones were used, were used as indices in the analysis. The conclusions are as follows.

First, it is clear that abortion and infanticide practices using stones were based more on the physical properties of stones as a tool, i.e., the weight and solidity, than on the magical properties of stones. Only a few specific methods of abortion involve use of stones. For example, jumping down from a high place holding a stone, or moving around while holding a stone. In the case of the custom of infanticide, the physical properties of stones were used to kill infants, especially by using a stone mortar, which is sometimes considered sacred.

In the custom of avoiding pregnancy, it was found that people prayed by throwing or sitting on stones based on their spiritual or divine properties. In doing so, it was found that they consciously performed the opposite act of daily prayer, such as turning backward or hiding not to be seen, in order to achieve the goal of contraception.

Abortion, contraception, and other forms of infanticide to prevent birth, such as using stones to kill the child or inserting a *hozuki* stalk (a branch) into the genitals, as described in *Nihon saniku shūzoku shiryō shūsei*, reveal the sexual practices and lives of women who were forced to use dangerous methods to perform abortions.

The author clarifies the compelling desires and realities of the women who performed birth control using or without stones, as well as the viewpoints of the people of the time who referred to stones to describe women who did not or could not give birth, calling them stone women (*umazume*).

Key words: pregnancy/childbirth, birth control, childbirth customs, prayer for safe delivery, stone beliefs, spirituality, modernity

はじめに

1. 先行研究

1.1 避妊や墮胎、間引きの先行研究

1.2 石の信仰に関する先行研究

2. 安産を願う石の習俗

3. 石を用いた墮胎・間引き・避妊の習俗

3.1 墮胎の習俗

3.2 間引きの手段としての石臼

3.3 避妊を祈願する石の習俗

4. 石女一子を「産まない」、または「産めない」女性

おわりに一産育習俗における石の両義性

はじめに

民俗学の研究では、子授けや安産などを願う石の習俗について早くから報告がなされてきた。例えば新谷尚紀は、石をめぐる民俗はきわめて広く多様でかつ複雑であるとし、「人生儀礼と石とに限っても成人、婚姻などさまざまな場で石の儀礼がみられる」¹⁾と指摘している。このように人生の節目となる機会にさまざまな形で石が用いられてきた。新谷は、産育習俗と葬送習俗における石に注目し、「産育と葬送という境界的時空のなかで緊張と不安につつまれた人は、一種の境界領域としての水界からもたらされる石を身近かにおくことによって安定状況を得られるという心意と儀礼のしぐみがそこにある」と分析している²⁾。また丸山久子は、生児の成育に伴うお祝いの際に食膳に石を添える習俗に注目し、それらの石を「石のおかず」と呼び、石の予祝的な意味や石が産神の神体となることを分析した³⁾。

しかし一方で、安産祈願や生児の生育に関する習俗以外の、避妊、墮胎などの「産まないこと」つまり「出生コントロール」や嬰兒殺しである間引きと関連させた石の習俗の研究はほとんどなされてこなかった。そこで本稿では、近世史における避妊、墮胎、間引きなどの研究を参照し、あわせて筆者がこれまで研究を進めてきた石や岩石の信仰との関わりから、石を用いた避妊、墮胎、間引きなどの習俗について分析していく。またその際、用いられる石の特徴、石の働き、石の呪術性などについても注目し、それによっ

て、安産以外の産育習俗において、石に託された民俗の心意を明らかにしたい。民俗の心意とは柳田国男による用語で、伝承されてきた生活知識、感覚などの人間の深層意識を意味する⁴⁾。

とはいえ、避妊や墮胎、間引きに関する資料は、産育習俗の中で決して多いわけではない。その理由として考えられるのは、民俗学に限らず歴史学においても、たとえば『日本近世マビキ慣行史料集成』を編集した太田素子は、そもそも墮胎や避妊、間引きなどにかかわる地方史料自体が残されていない場合が多いこと⁵⁾、そして社会の片隅の事件として軽視されてきたことなどを挙げている⁶⁾。また沢山美果子は、民衆の日常的営みである出産に関する記録がほとんどないため、民俗慣行にまつわる史料、習俗などを一つの手がかりとして、民衆の〈産〉の心性を読み取っていくという研究の方法論を示した⁷⁾。

なお本稿が主に分析の対象とする『日本産育習俗資料集成』には、「避妊、墮胎、間引き」の項目が設けられているが⁸⁾、それぞれ異なる行為であるにもかかわらず、それらを同等に列挙しており、それぞれの行為がきちんと把握されているとは言えない。そこで本稿ではそれらを再考した上で、石を用いた習俗を手掛かりとし、産む・産まないことに関する民俗の心意を明らかにしていきたい。

1. 先行研究

1.1 避妊や墮胎、間引きの先行研究

民俗学の研究は、これまで主に安産を中心に

進められてきたが、避妊や墮胎、間引きを対象にした研究には、次のようなものが挙げられる。主なものとして、高橋梵仙の『墮胎間引の研究』⁹⁾をはじめ、千葉徳爾、大津忠男の『間引きと水子—子育てのフォークロア』¹⁰⁾、松崎憲三の「墮胎（中絶）・間引きに見る生命観と倫理観—その民俗文化史的考察—」¹¹⁾、鈴木由利子の一連の研究「選択される命—「育てようとする子ども」と「育てる意思のない子ども」—」¹²⁾、「間引きと生命」¹³⁾、『選択される命—子どもの誕生をめぐる民俗』¹⁴⁾、佐々木美智子の『「産む性」と現代社会—お産環境をめぐる民俗学—』¹⁵⁾などがある。また水子供養との関連から、人工妊娠中絶を扱ったものに森栗茂一の研究なども挙げられる¹⁶⁾。水子供養の研究は欧米の研究も含め数多いが、1970年代以降の民俗であるため、ここでは触れないことにした¹⁷⁾。近年では安井眞奈美らが「思いがけないお産の民俗」¹⁸⁾として、安産以外も視野に含めて生命観や身体観を考察する研究を進めている。

また近世史の研究では、落合恵美子が江戸時代の間引き・墮胎に関する言説や政策、民俗慣行の社会背景と心性を考察し、特に賀川流産科学という産科科学の革新によって、新しい心性が登場すると指摘し、「江戸時代の出産革命」を唱えた¹⁹⁾。

沢山美果子は『出産と身体の近世』において、女性の〈産む〉身体に焦点を置き、墮胎・間引きの史料と民俗慣行をもとに、性差、社会、権力などの視点から、近世の女性の身体観、生命観などを明らかにしている。またそのなかで、津山藩の墮胎・間引き取締まりの史料と民俗慣行にまつわる史料を手掛かりとし、人々の〈産〉の心性を考察し、当時の人々は、お産や〈産む〉身体を安全に保ちたいという、出産について受け身ではない態度を持っていたと指摘した²⁰⁾。また沢山は、近世の津山城下町の史料をもとに分析するなかで、「18世紀後半から19世紀前半の津山城下町では、出生前の墮胎と、出生以後の

間引きの線引きは明確であり、たとえ早産の子どもであっても、いったん産まれた子供を、間引くことについては、葛藤をとまなうような状況が生まれてきていたのではないかと指摘する²¹⁾。また太田素子の『日本近世マビキ慣行史料集成』は、マビキ慣行の動機や選択的に子どもを育てるという教育意識のありようを研究し、マビキ行動の心性史の研究という方法論を確立している²²⁾。

以上の研究などを参考にして、避妊、墮胎、間引きの用語の整理を行っておく。青柳まちは「墮胎と間引きは混同されて用いられることもあるが、前者は出生前に、後者は出生後に人為的に赤児の生命を摘みとることである」²³⁾と定義したが、本稿もまた、出生の時点を境にして、「墮胎」と「間引き」を明確に区別して見ていきたい。

なお避妊という言葉が、人々の間に普及するのは近代に入ってからであるという。安井眞奈美は「奈良県風俗誌」という近代の資料群を分析する中で、「1910年代の奈良県の村落では、『避妊』がまだ膾炙していなかったことが窺える。『バース・コントロール』あるいは『産児調節』や『産児制限』といった名称のもとで避妊の是非についての議論が活発化するのには、第一次世界大戦終結後の1919年以降のことである²⁴⁾。その後1922年（大正11）に、バース・コントロール運動に大きな影響を与えたマーガレット・サンガーが初めて日本を訪れる」と指摘しているように、村落部などで「避妊」という言葉が一般に用いられるようになるのは、1922年以降であると考えられる²⁵⁾。本稿では「避妊」という言葉も「出生コントロール」の一つとして捉え、とくに民間に伝わる具体的な方法を考察していきたい。

また岩田重則は墮胎をめぐる生と性の現実を見たとき、注目せざるを得なかったことは、明らかに前近代的な残存と思われるそれらが、近代社会においても根強く存在し続けていたこと

であり、それらが徐々に消滅し、変化を始めるのは1910年代から1920年代以降であった、と指摘している²⁶⁾。さらに、墮胎という言葉は完全に死語となっているわけではなく刑法の中であり、優生保護法(のちの母体保護法)の施行によって人工妊娠中絶が浸透し、現在に至っている²⁷⁾。

1.2 石の信仰に関する先行研究

本稿では、避妊、墮胎、間引きの習俗を、とくに筆者が研究を進めてきた石の信仰や習俗に関連させて論じていく。そのため、まず民俗学の石の信仰に関する研究を概観し、次に産育習俗の中で石に関わるものを詳しくみていく。新谷が指摘しているように、日本の民俗では、産育をめぐる種々の石が大きな役割をはたしてきた²⁸⁾、という点を検証していきたい。

石に関する信仰は早くから注目され、研究成果が蓄積されてきた²⁹⁾。鯨絵の研究を進めたC・アウハントは、石の信仰は日本の民俗宗教の中で根本的な役割を果たしており、その最古層に属する要素である、と指摘している³⁰⁾。

近年では、石の信仰と人のかかわりに焦点をあわせた研究がみられる。例えば倉石忠彦は『道祖神伝承論・碑石形態論』³¹⁾において、重層的な道祖神信仰(祭祀)を理解するために石神信仰と道祖神信仰との関係を考察する必要があると指摘し、記紀や風土記、『万葉集』などの資料から、道祖神と石神の共有する「石」に対するイメージのあり方を検討した。そして、「石」をモノとしての「石」(自然の無機物)、コトとしての「石」(建材)、コトとモノとしての「石」、ココロとしての石(感情・精神の面)に分け、その様態は人とかかわり方によってそのつど顕在化する、と結論づけた³²⁾。さらに、石がココロ(感情・精神)に作用する存在であるとも考えられていたと指摘している³³⁾。つまり、人とかかわり方によって石の様態は異なるが、逆に石が人の感情・精神にも影響を与える、ということになる。

吉川宗明は『岩石を信仰した日本人』にて、

岩石信仰を祭祀機能によって分類した³⁴⁾。また『古事記』『日本書紀』『風土記』は岩石をどう記したか―奈良時代以前の岩石信仰と祭祀遺跡研究に資するために―では、『古事記』、『日本書紀』と『風土記』における岩石に関する記述を基に、奈良時代以前の人々が岩石に対して抱く精神性、火や水などのほかの自然環境との関係および人が岩石に与えた機能をデータ化し、石神、磐座、磐境の諸概念を再検討し、岩石信仰における岩石と人の関係、そこから生じる諸要素、つまり岩石信仰の背景(他界観、宿りかた、境界観)、人の選択(人が岩石に与えた機能)、現象(岩石信仰の様態)を概念図にまとめた³⁵⁾。吉川は岩石に人がどのような精神性を反映するのか、どのような機能を選択するのかなど、人との関係に注目し岩石信仰を考察している。

上記の石の先行研究では、産育習俗との関係を直接は論じていないものの、石に人がどのような心性を託してきたのかを考える際に重要な視点を提示している。筆者は、とくに倉石と吉川の研究を参照し、産む・産まないという生殖に関わる点から石の習俗を明らかにしていく。

次に、石を用いた産育習俗を扱った研究を詳しく紹介したい。先述した丸山久子は帯祝いから産飯、七夜、食い初めまで石を添える習俗を「石のおかず」とし、石の予祝的な意味、産神の神体とされることを分析したが、その際、石の意味は産神の御神体とそれに供える御供物との間で混同が見られ変化していると指摘した³⁶⁾。丸山は、石の習俗に対する民間の解釈が、安産や生児の歯が固く丈夫に育つなど、地域によって多様であることを示した。

新谷尚紀は「境界の石―産石と枕石―」において、おもに『民俗地図』、『日本産育習俗資料集成』などをテキストに、全国の産育儀礼と葬送儀礼における石の儀礼を詳細に整理し、各段階の意味づけを分析した。本論文の冒頭で示した通り、産育と葬送のなかで特に水界の石を多く用いた事に注目し、その心意と儀礼を支える

のがモノザネであると論じた。モノザネとは、記紀の伝える天の安河における天照大神と素戔鳴尊との間の誓約と子産みの物語において用いられる「モノザネ（物実・物根）」という語の意味であると指摘した。そして産育の場合には、妊娠前後の階段では石を魂の象徴とみるいわば象徴の観念が、また出産前後の階段では石を産神の神体としてみる神の依代の観念が、成育の階段では石の性質が生児の健康に影響を与えるとする類感の観念がそれぞれ強くあらわれていると分析した³⁷⁾。

新谷は産育儀礼の各段階における石の習俗を整理し、石の意味を解釈することに加えて、モノザネという語を借用し、石のもつ安定させる性質を強調した。そして、産育習俗の各段階における石の意味を魂の象徴、産神の神体と石の性質が生児の健康に影響を与えると解釈した。それら石のもつ意味の解釈については、本稿でも石の習俗を分析する際に参考にしたい。

飯島吉晴は「子供の発見と児童遊戯の世界」³⁸⁾や「いのちの誕生と成長」³⁹⁾などにて、石を用いた産育習俗において、石は産神の依代として生児に込める靈魂を象徴する機能と、生児と同一化したり、あるいは生児の靈魂が戻るのを防いだりする機能という二重性があると指摘した。飯島は石がこの世とあの世の媒介であるため、生児の靈魂が戻るのを防ぐ機能を持っていると分析し、石のもつ意味を広く解釈した。

その後も、石を用いた産育習俗の研究は、先述の研究に影響を受けながら進められてきた。例えば八木透は『日本の通過儀礼』において、食い初めの石を挙げ、単に子供の靈魂を象徴するのみならず、命の更新の意味もあると主張した。そしてかつての呪術的な儀礼には、食い初めのようにいろいろな意味が複合的に組み合わさって、今日まで伝承されているものが多いと分析した⁴⁰⁾。

以上の先行研究によると、産育習俗における石の意味は多様であるが、主に産神の依代や、

子供の靈魂の象徴、生命の更新などと解釈されてきたことがわかる。

またこれまでの産育習俗の研究は、おもに安産の習俗に注目してきたと言える。その背景には、女性が出産し子どもを育てていくことに対して社会やイエの大きな期待があり、安産祈願が重要であったことが関係している。しかしこれまで先行研究を見てきたなかでは、安産以外の習俗も存在しており、そこでも石が用いられてきた。その点を次に分析していきたい。

2. 安産を願う石の習俗

本稿では石を用いた間引き、避妊の習俗を分析していくが、研究の蓄積が多い安産を願う石の習俗をまず取り上げたい。

「はじめに」で紹介したように、多くの研究者が石を用いた産育習俗に関心を持ち、研究を進めて来た。先述した新谷尚紀は、『民俗地図』『日本産育習俗資料集成』の民俗調査報告書などをもとに、「出産以前」、「出産直後」と「出産以後」という時間に分けて、「何のための石か」、「どこからどんな石を」、「どのようにするか」などを基準に、石を用いた産育習俗を整理し、各段階における石の意味を考察した。本章ではそれらの先行研究を踏まえて、『日本産育習俗資料集成』および『岡山県下妊娠出産育児に関する民俗資料』をもとに、妊娠、出産、産後、育児に分けて分析していく。

本稿が分析の対象とするのは、『日本産育習俗資料集成』に記載された各府県別産育習俗の記録である。昭和9（1934）年、恩賜財団母子愛育会の事業の一つとして柳田國男の企画により、「全国各地ニ於ケル妊娠、出産及育児ニ関スル行事、伝説、習俗等ヲ調査シ、以テ母子愛護強化ノ資ニ供」、「未曾有の大規模な一斉調査」が実施された。その後1975年に刊行された本書は断片的な事例の記載になってはいるが、また近代の産育を知る民俗資料として貴重なものと言える。

『日本産育習俗資料集成』では、石を用いた習

俗は子授け祈願から、子どもの夜泣きに利く石などの育児まで数多くみられる。まず妊娠中には「妊娠祈願」、「安産祈願」、「胎児の性別判断」、「帯祝い」に石を用いた習俗がある。それらの習俗では、石を石神として参詣するものがあり、例えば岡山県浅口郡玉島の陰陽石に祈願すれば、孕むという⁴¹⁾。また石に腰掛ける、石を抱く、石を投げるなどの行為によって、妊娠や安産、子育ての祈願をする習俗もある。また大分県日田郡では、産む石に腰掛けて子授けを祈願するという⁴²⁾。

出産の際には、石を産神または産神の供物として用いていた。たとえば愛知県萩原では、産褥の本尊は小石（まん丸のもの）とし、三日目にあづき飯と豆腐の汁を炊き、その小石に供へるという⁴³⁾。丸い形のほかに色付きの小石（黒、白、赤、青）を用いた習俗もある。たとえば愛知県老津では、妊娠五か月目の戌の日に、産神には帯祝の餅と神酒と一汁三菜の本膳を供え、その際に形李大の黒き丸石二個を添える⁴⁴⁾。黒い石のほかに、赤い石や白い石、青い石もみられる。丸い石、鮮やかな色をしている小石を産神または産神の供物とするのは、子どもの健康やえくぼができること、顔形のよいことなどの願いを込めた呪術的な意味があると考えられる。例えば愛知県幸田では、神に供える産飯の上に小石をのせるのは、赤子の頭が早く固まるようにの願いであるという⁴⁵⁾。この点についても、新谷は石の性質が成育の階段では生児の健康に影響を与えるとする類感の観念が強くあらわれていると指摘した⁴⁶⁾。

それに対して、石を用いた「胞衣」の習俗と「臍の緒」の習俗は少ないが、それぞれは重し、台として用いられていた。そしてそれらは生児に影響を与える場合もある。例えば香川県三豊郡では、産部屋付近の上に石を積み重ねておく。もしこの石の積み重ねが十分でなければ赤子が夜泣きをすると伝えられている⁴⁷⁾。胞衣を埋めた重しとされる石は、生児の成長にも影響を与

えると信じられていた。

石を用いた育児習俗は最も多様であり、それぞれ「乳付け祈願」、「三日祝い」、「七夜祝い」、「名付け」、「産毛そり」、「宮参り」、「食い初め」、「初誕生」と「育児に関する俗信・呪法」に見られる。これらの習俗は『岡山縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』においても見られる。例えば岡山県英田郡西栗倉村では「出生後百日目をクイズメと稱して、此の日嬰兒に膳をすえる。膳へは青い小石を置く。之は頭が固くなる様にといふ意味である」という⁴⁸⁾。これらの習俗は子どもの成長や、子どもの病氣平癒などに用いられていたため、ここでの石は子どもの成長を守る意味であると考えられる。

石を用いた安産を願う習俗の特徴をまとめてみると、石に祈願するのみならず、石に腰掛ける、石を投げるなどのように、何かの行為を伴って祈願する習俗が数多く見られる。また石の形態も、石を用いる習俗に影響を与えていたと推測できる。例えば、産神・産飯、食い初めの習俗は、「子供の頭が固くなるように」や、「健康に育つ」、「歯が丈夫になる」などの願いを込めて石を膳につけて祈る。もし形がよく（丸石）、鮮やかな小石（赤・青・白）であれば、丈夫で健康であることを祈るのみならず、生児の心の美しいことや、顔形のよいことなども祈ることになる。つまり、小石の形・色などの形態を重視してそれが生児の健康や心に影響すると考え、産飯にのせる石や産神の御神体とする石を選んだといえる。

3. 石を用いた墮胎・間引き・避妊の習俗

3.1 墮胎の習俗

『日本産育習俗資料集成』では、「避妊・墮胎・間引き」という一章を設け、全国各地の習俗を収集している。本節では、おもに「避妊・墮胎・間引き」の章に列挙された事例から墮胎の習俗の実施方法や、特徴、石を用いたかどうかなどについて考察していく。

まず『日本産育習俗資料集成』の「避妊・墮胎・間引き」に記載された全国の習俗から、墮胎に関するものを抜き出して整理してみた。その結果、全国各地から195件の墮胎に関する習俗や方法が報告されていることがわかった。ここでは地域に限定せずに墮胎の方法について整理し、多いものから並べてみたところ、以下の通りとなった。また、それらの習俗を抜粋し、表1にまとめた(表1)。

1. 女性器に異物を挿入する (88件)
2. 食べ物による (64件)
3. 医師・産婆・針師などによる (33件)
4. 呪術的行為 (6件)
5. 跳び降りる (4件)

最も多く用いられた方法は、性器に異物を挿入して墮胎する方法で88件にのぼる。異物として用いたものはほおずきの根、ゴボウの根、桑の根、山吹の茎などの植物の茎と竹箸、箒の幹

などの先を尖らしたものである。このうち、ほおずきの根を性器に挿入して子宮をつくのは最もよく知られた方法であった⁴⁹⁾。愛知県額田郡幸田村地方では、ほおずきの根の強軟の度が適当であると説明している⁵⁰⁾。

2番目に多い墮胎の方法が、食べ物によるものである。食べ物にはとうがらし、ほおずきの根、なまいか、するめ、酢味噌、種子油など、刺激の強いものと油気の多いものが挙げられる。さらに水銀などの毒も服し、母体が衰弱になり命を縮めると記載している⁵¹⁾。これらは妊娠中に禁忌とされた食べ物であるが、それを墮胎の手段として食べたことになる。なかには、ほおずきの根を煎じて飲むという方法もあり、富山県東西砺波郡南部の山麓地方や、岐阜県武儀郡武芸村、山梨県北巨摩郡などの地域でこの方法を用いた。ほおずきの根(酸漿根)に含まれるヒストニンには子宮収縮作用があるため、墮胎に用いるのにふさわしかった。先述したように、性器に異物を挿入する際にも、ほおずきの根が

表 1

方法 (件数)	用いたもの (手段)	具体的なやり方
性器に異物を挿入する (88)	ほおずきの根	ほおずきの根を三日間ぐらい陰部に差し込む
	山ごぼう	山ごぼうをとがらして裾から入れる
	山吹の茎	山吹の茎を子宮口に達するまで一夜ぐらい入れておく
食べ物による (64)	するめ	するめにからしをそえて食べる
	ほおずきの根	ほおずきの根を煎じて飲む
	種子油	種子油を飲んだりする
医師・産婆・針師などによる (33)	按摩	按摩が墮胎を引き受ける
	手術	按摩・医師などが手術する
	灸	臍の上へ灸を据えると下す
呪術的行為 (6)	カラウス	カラウスを附いて下す
	護符	鬼子母神へ祈願し、護符をもらいこれを飲む
	護符	護符を飲む
跳び降りる (4)	高い所	山へ行って高い所から跳び下る
	高所	花柳界では酒を飲んでから、高所から跳ぶ
	小川を跳ばさせる	与那国島で小川を跳ばさせる

最も多く用いられたのは、このことにも関連していると考えられる。

3番目に多いのは、医師・産婆・針師などによる墮胎である。医師、針師は依頼すれば墮胎の手術をしたが、産婆にも依頼した。墮胎術に長じる産婆は、コロシババやサシバアなどと呼ばれ、ほおずきの根や竹箸、竹楊子などを用いて、妊婦の子宮に差し込んで、墮胎をさせたという。なお明治政府は1868年に、産婆の売薬と墮胎の取り扱いを禁止しているが、それでも公にならないように闇で人知れず産婆に頼み、墮胎が行われていた⁵²⁾。

4番目の呪術的行為による墮胎方法は件数が少ないので、以下に列挙した。内容の重なるものがあるため、6件のうち3件を示す。

- ・カラウスを搗いておろす⁵³⁾。(岡山県御津郡横井村)
- ・鬼子母神からナガシゴフ(流し護符)というものを出していた。これは墮胎を希望する者が、鬼子母神へ祈願して、護符をもらいこれを飲むのである。護符は紙へ墨で何か字を書いてこれを丸めたものであったという⁵⁴⁾。(岡山県岡山市浜野)
- ・折宮の神官岡権之丞之所から、ナガシゴフを出す⁵⁵⁾。(岡山県岡山市石関町)

以上の事例から、呪術的行為としてカラウスを搗く、神仏へ祈願し、護符を飲むという行為が挙げられる。

5番目は、高い所から跳び降りる方法である。例えば、花柳界では酒を飲んでから、高所から飛ぶ⁵⁶⁾、などが記載されている。

墮胎医の処置や墮胎薬は高額で一般には手が届かなかったので、女性たちは性器に異物を挿入する、水銀を飲む、高い所から跳び降りるなどの方法を使った。鳥根県隠岐島後ではバズカセ(えこころぐさ)の茎の方法が飲食による諸方法よりも有効であったという⁵⁷⁾。『日本産育習

俗資料集成』には、先述したように性器に異物を挿入する方法が最も多くあるが、それに対して、呪術的行為による墮胎方法は少なく、護符を飲んだり、神仏に祈願したりしていた。その中で、カラウスを搗いておろすという習俗に注目したい。カラウスつまり臼には木製と石製とがあるが、日常生活のなかで臼が果たす役割はきわめて大きく、かつては臼を一家の中心的な道具として尊重し、神聖なものとして扱った⁵⁸⁾。岡山県御津郡横井村の習俗ではカラウスを神聖視し、墮胎の呪術の対象として扱った。

また、『岡山縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』⁵⁹⁾に、岡山県における墮胎の方法が詳細に記されている。本書でも性器に異物を挿入するという墮胎方法が最も多く、呪術による墮胎方法は「カラウスを搗いて出す」⁶⁰⁾や、「鬼子母神から、ナガシゴフ(流し護符)というものを出していた」⁶¹⁾などがある。『日本産育習俗資料集成』の墮胎の方法と重なっており、両方の資料を併せると、石を用いた習俗はカラウスを用いたもの以外にないことがわかる。

以上のように墮胎の方法としては、石を用いるかどうかは別として、ほおずきの根などを性器に挿入するという母体に危険な物理的な方法が数多く用いられたことがわかる。『日本産育習俗資料集成』と『岡山縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』に掲載された墮胎の事例を見る限り、石を用いた習俗は「カラウスを搗いておろす」以外に記載はない。ただし、「石を抱いて崖から飛び降りる」、「漬け物石を持って動き廻った」⁶²⁾などの事例が報告されており、墮胎には石の呪術性よりも、石の重量という物理的な性質を用いたことがわかる。

3.2 間引きの手段としての石臼

間引きは、生児が産まれてから行われるため、呪術的な行為よりも圧死、窒息死などの直接的な方法が取られた。再び『日本産育習俗資料集成』を参照すると、膝や腰、尻などで圧死させるほ

かに、臼、槌などの道具で圧死させる方法も見られる。例えば神奈川県、新潟県、長野県、鹿児島県では間引きの手段として、かつて臼で子供を圧死させていたという「風習」が語られていた。また臼には、搗き臼、挽き臼などたくさん種類があり、搗き臼には木製や、石製の臼もある。臼の名称もさまざまで、例えば粉挽き臼も石製の搗き臼も、どちらも石臼という⁶³⁾。明確に石臼で間引きを行った事例があるが、臼として記述している事例もみられる。

例として挙げるのは、新潟県の南魚沼郡塩沢町の事例である。

昔貧家の子福者が生児を圧死させた例は往々あったと聞く。生児をぼろに包み、臼をのせて圧死させたという噂が残っている⁶⁴⁾。

貧しい家にとって、多くの子供を育てることは家計に負担をかけるため、出産と同時に臼で圧死させた。これは稀なことではなく、多くの地域でこのような習俗が報告されている。神奈川県農家の臼で子供を圧殺したことが多かったと報告している。

このような風は昔の農家には多かったといわれる。なかんずく圧殺しようとして用いた石臼を苦もなく押しつけてはい出し、こうして成長したので名を臼五郎といったなどという口碑もある（川崎市地方）⁶⁵⁾。

この事例も子供が多い場合、石臼で圧殺して間引いたことを示している。石臼は身近な生活の道具であったが、その石の材質や重量によって間引きの道具にもなり、「臼殺」という言葉も用いられた。それについて佐々木喜善が、ザシキワラシは臼の下に敷いて圧殺された子供の霊ではないかと推測している⁶⁶⁾。

以上の習俗では、農家の生活が苦しく、子ど

もの人数が多いため、間引きを実施したが、松崎憲三は「俗信によるもの以外に間引きに及ぶ理由には、経済的理由、世間によるもの、人間関係によるもの、家族計画に基づくとおもわれるもの、私生児や障害児の場合」と分析している⁶⁷⁾。経済的理由、家族計画などだけでなく、多胎児や親の厄年などの俗信も子殺しの要因であったことがわかる。

臼は単に生児を圧死させる道具ではなく、臼を産神の代わりにしたり、臼に触るとお産が軽くなったりする俗信もみられる。

ある商人が、日が暮れて家に帰れなくなったので、箒の神様のお堂に泊まった。そこで臼の神さんが「ほうきの神さん、どこそこのお産をするのだから来てやれんか」と呼びに来た。(略)すこし経って臼の神から「箒殿、生まれたぞよ」と知らせがあった⁶⁸⁾。

ここでの臼神は、箒神の代わりにお産の神として現れた。例えば、宮城県加美郡には以下の習俗が記されている。

漁民鹿野八十郎が熊野神社の御神体を拾い上げた時、臼に薦をかけて奉安した。その折の臼というのが今に残っていて、この臼に触れば、病気にならぬ・災難に逢はぬ、産が軽いなどと言われている⁶⁹⁾。

臼は熊野神社の御神体として、触るとお産が軽くなる御利益がある。臼について、愛媛県には「ウブイレ」の習俗があり、幼児を驚かせるとウブが抜け、それを戻すにはその幼児を臼の中に入れて呪文を唱え、杓子で招くという⁷⁰⁾。幼児の魂はまだ不安定であると考えられ、抜ける場合には臼の中に入れ、ウブを呼び戻した。飯島吉晴は、産神が箒・杓子・臼・男根形の神体など具象的なアイコンを持った神で、産の穢れもいとわず、直接に出産に関与する産神になっ

ていると示した⁷¹⁾。つまり、石臼を産神のご神体とする場合のあることが分かった。

石臼は時代が進むにつれ使われなくなったが、かつては生活必需品であった。先述したように、かつて人々は臼を一家の中心的道具として尊重し、神聖なものとして扱った⁷²⁾。それゆえに、石臼を供養するために石臼塚のような供養塚が作られたこともある。たとえば東京の小金井神社の境内には石臼塚があり、これは民家の石臼を一同に集めて作られた供養塚である⁷³⁾。また筆者は、2018年7月に新潟県佐渡島の白山神社の石臼塚を訪ねた。白山神社は羽茂地区小泊にあり、隣接する真野地区椿尾と共に石工で栄えた土地である。1977年に、使わなくなった石臼を惜しんだ地元の人々が各家庭の石臼を集め、白山神社に奉納した。これは、現在の「佐渡島の百景」になっている。

このように臼はかつての日常生活のなかで大きな役割を果たし、触るとお産が軽くなるという一面もあったが、同時に間引きの習俗において、子殺しの道具とされる一面もあった。臼に触るとお産が軽いことや、子どもの魂を呼ぶときに臼に入れることなどは、臼の呪術的な面を重視したと言えるが、それに対して、間引きの場合は、石の材質や重量などによって臼が子殺しの道具とされたと理解できる。

3.3 避妊を祈願する石の習俗

『日本産育習俗史料集成』には避妊の方法として、灸を据える、神仏に祈願する、呪術を行うなどの方法が記載されている。本節では、石を用いた避妊の習俗があるのかどうか、またあるとすればその特徴は何か、といった点を明らかにしていく。

まず『日本産育習俗史料集成』における全国の避妊に関する習俗を整理したところ、67件に及んだ。呪術的行為によるもの、神仏に祈願するもの、食べ物によるもの、灸によるもの、身体に対する行為によるものに分けられる。具体

的には以下の通りである。

1. 呪術的行為によるもの (29件)：たらいの底を叩く、後産をまたぐ、餅を供える、名付け、男の禪を踏む、あずきを飲む、腰巻きを結ぶ、機を織るおさを逆さにかける、産神に石を投げる、底抜けひしゃくをそなえる、井戸に黒白の石を投げる
2. 神仏に祈願するもの (21件)：地藏尊、吉野権現、鬼子母神、便所の神様、杓子神社、庚申堂、産神、観音菩薩、出雲枕木山、宮島様、太田観音様、石に腰かける
3. 食べ物によるもの (8件)：ほおずきの根、水、酢、からすの巣、そば
4. 灸によるもの (6件)
5. 身体への行為によるもの (3件)：腹部を冷やす、遅く大便に行く、小便に行く

以上のように、避妊に関する習俗において呪術的行為による習俗は29件あり、最も多いことが明らかとなった。続いて神仏に祈願することであり、21件である。避妊薬や避妊具は近世から存在していたが⁷⁴⁾、呪術的または神仏に頼る習俗も広く行われていたことが窺える。そのなかで、石を用いた習俗は以下の4例である。

事例1

産神に向かってなるべく遠くから人の見えないように石を投げると妊娠しないという（長野県更級郡稲荷山）⁷⁵⁾。

事例2

井戸にうしろ向きになり黒白の石を幾つでも生まれぬようにとおまじないして井戸の中へ投げ込む（福岡県直方地方）⁷⁶⁾。

事例3

多産で困る人と小児が欲しい人と同伴して、太田観音に参詣祈願し、堂の裏手の石に相互に

腰かけ互いの腰巻きを交換すれば思いがかなうという（福岡県三潴郡）⁷⁷⁾。

事例4

粕屋郡新宮磯崎神社に二個の石があって一個を生む石、他を石女石という。多産の者と石女と二人行き、生む石に石女が腰かけ、多産婦は石女石にかければ、多産婦は産まないようになり、石女は妊娠する（福岡県）⁷⁸⁾。

事例1では、産神に向かって人が見えないように石を投げる行為であるが、事例2では井戸にうしろ向きになって黒白の石を幾つでも井戸の中へ投げ込む行為である。この2例から、石を投げることによって妊娠しないことを祈願していることがわかる。中沢厚は何かを祈願し、小石を投げるのは、人間が「信号」として受け止めて、小石にかかる伝達的な機能を発揮したのであり、これは小石の霊性または神性によるものであると指摘している⁷⁹⁾。これに従えば、事例1と事例2で石を投げるのは、投げる人間が避妊の願いを持ち、石を通して、産神または井戸にその願いを伝達している、と考えられる。

また「人の見えないように」、「後ろ向きになり」石を投げるのは、意識的に見ない行為をしていると考えられる。常光徹は、「後ろ向きになって」というのは、手を体の後ろにまわしたり、肩越に投げたりし、反対の行為の一つであると論じた⁸⁰⁾。ここでは、「見えないように」、「後ろ向きになり」石を投げるのは、日常的に祈願する行為とは違って、逆の行為であるといえる。つまり、意識的に見ることを避け、産神または井戸に石を投げるのは、妊娠の祈願ではなく、避妊の祈願であることを示すのではないかと考えられる。

また事例3と事例4は、石に腰かけることによって避妊を祈願する習俗である。ここでは、多産の人と子どもの欲しい人が一緒に石に腰掛けて祈願することに注目したい。石に腰掛けること

は、妊娠祈願の習俗ではよくみられるが、『日本産育習俗資料集成』には石に腰掛けて妊娠祈願をする事例が5件ある。岡山県備前市の三石神社の境内における子持石は、神功皇后が腰掛けた石であるという。

和気郡三石町にあり、昔神功皇后三韓を征伐し給ふ時、此の地を御通過あらせられ、今ある石の上に御腰をかけさせ給ひ御休憩あらせられた。爾来此の石は恰も子を孕むが如く白色の石を包含する様になったもので、俚民之を孕石神と稱し、腰掛石を御神体として祀る様になった。児を望む者は境内の孕石を拾ひ之を持ち歸って祈る。妊娠すれば、その石に他の小石を添えてお礼に詣る⁸¹⁾。

この伝説から、三韓征伐をしたときに、妊娠している神功皇后が腰かけてから、石は小石をはらむようになり、子授けの祈願対象になったことが窺える。神功皇后の腰掛けるという行為が、石に子授けの霊力を与えたと考えられる。また子授け、安産祈願には、神功皇后にまつわる伝承が数多くある。これらの伝承のうち、鎮懐石の伝承はよく知られている。鎮懐石とは、仲哀天皇が亡くなった後、仲哀天皇9（200）年に神功皇后が三韓征伐に出向いた際に、出産を遅らせ、安産を祈願し、肌身につけた二つの石である。鎮懐石に関する記載は記紀をはじめ、万葉集、風土記などに見られる。

事例4では、生む石に石女、後述するように産まない女性、産めない女性が腰かけ、多産婦は「石女石」に腰をかければ、多産婦は産まないようになり、石女は妊娠するという。つまり、「生む」霊力を石女に与え、石女石の「生まない」霊力を多産婦に与えると考えられる。事例3では、同じく石に腰掛け、腰巻きを交換すると願いが叶えられる。これもお互いに「生む」霊力と「生まない」霊力を交換すると解釈できる。またこ

こでの石は「生む」と「産まない」霊力を伝達する媒介とも考えられる。

以上のように、石を投げる、または腰掛けて避妊を願う習俗では、石が持つ霊性または神性が前提にされているものの、願いを叶えるには「投げる」、「腰掛ける」という行為、そして「見えないように」、「後ろ向きになり」といった通常とは逆の行為が欠かせないと言える。つまり避妊を祈願する習俗では、石に祈るだけではなく、石に対して何らかの働きかける行為も必要であったと考えられる。

4. 石女一子を「産まない」、または「産めない」女性

「石女（ウマズメ）」とは、「子を産まない、また産めない女性のことを指す」⁸²⁾ 言葉である。「ウマズ」は「不毛」あるいは「産まず」と書き、「メ」は「女」であるため、「ウマズメ」は「産まず女」の意味となる。そして、その「産まず女」の当て字は「石女」であることから、「石」は「ウマズ」の意味であると理解できる。また『広漢和辞典』を調べると、「石」の項目には「役に立たない意味を表すことば」との意味が記されており、例として「石女」を挙げている⁸³⁾。子供を産むことが当たり前とされた時代では、子供が産めない、または産まない女性は「女性として役に立たない」と考えられ、石女と呼ばれていたと考えられる。この点について青柳まちは「忌避された性」にて、「不妊すなわち石女、ウマズメ」は女性としての役割を果たすことのできない甲斐性のない人間であり、人々から非難される存在であった」と指摘している⁸⁴⁾。また西永兼康は、「石田」という言葉があるが、これは耕すことができない田を意味し、俗に子供を産む側である女性をさす隠喩に「畑」というものがあるが、子供を産めない女性は、何の実りももたらさない田んぼや畑のようなものであると説明した⁸⁵⁾。現在ではこの言葉を聞くことほとんどないが、かつては子供を産むことは家

の継承のみならず、地域の繁栄にまで関わることとして非常に大切なこととみなされたため、もし子供を産めない、あるいは産まない女性がいれば、差別的に扱われたことはこれまでの研究からも明らかである。例えば山崎祐子は「女の民俗誌」において、神奈川県相模原市の明治生まれの子のない石女の一生を取り上げ、「差別された」から「子供がない寂しいさや不安がある」という生活状況を紹介した⁸⁶⁾。

『日本産育習俗資料集成』における「石女と未婚女」⁸⁷⁾の章には、石女に対する各地の習俗が詳細に記載されている。「石女」のことを栃木県、山口県、愛媛県では「カラオンナ」と呼び、鳥取県、鳥根県では「竹女房」、「木女房」と称され、長野県、岐阜県、岡山県、愛知県は「イシオンナ（石女）」、「キムスメ（鬼娘）」、「キオンナ（鬼女・生女）」と呼ばれていた。つまり、子供が産めない女性は「子宮がない」または子を宿さない「空の女」、中空の「竹女」であり、さらに鬼のように避けられる「鬼娘」、「鬼女」などの名称を付けられた。おそらく周囲から差別されていたことが推測できる。

上記のように子供が産めない、もしくは産まない女性に対する多様な呼び方があるが、その中で、石女（ウマズメ）がより広く用いられていた。さらに、石女を「不吉」とみなして、村から追い出す地域もあった。鳥取県東伯郡東郷村などでは子のない女が村にいと村が絶えるとし、村上に置かず村下に追い出したという⁸⁸⁾。そのため、なんとか子供を産もうと、多様な手段を取った。そのなかに、石を用いた習俗が見られる。例えば、

事例 1

石女は袖の中に知らない間に石を入れておくと妊娠する⁸⁹⁾。(福岡県・山門郡)

事例 2

石女は種子を養い、または神官磯崎神社で産

む石に腰かければ必ず受胎するとか、または他の婦人の出産直後の胎盤および汚物の上に坐るとか、また産飯を人に知れないように食べれば妊娠するとの俗信がある⁹⁰⁾。(福岡県・鞍手郡)

事例1では、石女は袖の中に知らない間に石を入れておくと妊娠するという。つまり、石を入れると、石女が妊娠できると信じられていた。このように、この石は石女に「産む」霊力を授けるといえる。

事例2については、「避妊を願う石の習俗」という章ですでに分析したが、産む石に腰掛けるのは、産む石の「産む」霊力を石女に与えることと理解できる。

先述したように石女が妊娠するためには、「石を袖に入れる」または産む石に腰を掛けるという方法をとったが、妊娠祈願の際に、同様の俗信が数多く見られる。

事例3

子種塚の小石を人知れず懐中すれば妊娠する⁹¹⁾。(福島県)

事例4

不破郡静里村大字荒川の安田育示氏邸内にある特別の石に、子のない夫婦で訪れて腰かけると必ず妊娠するといつて、訪れるものがなかなか多い。九州辺りからまでくる⁹²⁾。(岐阜県・不破郡)

以上のように、「石女」という言葉における「石」が「産まず」という意味であれば、袖に入れた石と腰かけた石は「産む」ことを促す意味があったと考えられる。

また、「避妊を願う石の習俗」の章で考察した福岡県養基群田代太田観音の腰掛石は、子の多い女性が祈るとこれ以上子ができないというご利益もある。つまり、この腰掛石には「産む」霊力と「産まない」霊力という相反する霊力が

あるとみなされていたことは注目に値する。

おわりに一産育習俗における石の両義性

これまで見てきたように、産育習俗には石を用いた事例が数多くあり、これらの事例に対する研究者の解釈も異なる。とくに従来の研究では安産に関する石の習俗を、「産神の依代」、「子供の靈魂の象徴」、「生命の更新」などのキーワードによって分析する傾向があった。これに対して本稿では、安産だけではなく、避妊、墮胎と間引きの習俗に用いられた石にも注目して分析を行った。これらの事例を考察した上で、以下に示すような結論を得た。

まず、妊娠を避ける習俗と安産を願う習俗の類似点と相違点である。類似点の一つは、妊娠を避ける場合も安産を願う場合も、石の持つ霊性または神性を基に、投げるまたは腰掛けるなどの行為を加えて祈願するという点である。ただし妊娠を避ける習俗では、「人の見えないように」、「後ろ向きになり」といった、通常の祈願の行為とは意識的に逆になるようにして避妊の達成を願ったことである。つまり、両者の習俗では同じように石を用いるが、石に対する人の行為を逆にすることによって、もたらされる結果も逆になる、ということである。

もう一つの類似点は、石の外見を重視するという点である。安産を願う習俗では、赤・青・白などの石を用い、妊娠しないように願う習俗では黒白石を井戸に投げるなど、石の色を重視した。

また石を用いた墮胎と間引きの習俗では、石の呪術性よりも、モノとしての石の重量、堅固という物理的な性質を利用していただことがわかった。墮胎の具体的な方法には、ほおずきの根を子宮に挿入する、高い所から跳び降りるなど数多く挙げられたが、石を用いた方法はわずかであった。たとえば石を抱いて高いところから跳び降りる、漬け物石を持って動き廻るなどで、モノとしての石の性質を重視した。これは

間引きの習俗にもあてはまり、例えば神聖視される場合もある石臼を用いて、嬰兒を殺す方法などが挙げられる。

また先述したように、石女という呼び方における石の意味は「産まず」つまり、産まない、産めないの意味である。そして小石を石女の袖に入れる、という小石に妊娠を祈願する習俗、および妊娠祈願と避妊祈願の両方のご利益を持つ腰掛け石の習俗から、石に、産むことを促す信仰と、妊娠しないことを促す信仰の両者の存在が窺える。産育習俗において、石は神の依代、靈魂の器、産神への供物などの呪術的な意味に加えて、腰掛ける、投げるなどの人の行為を伴い、子授け、安産、生児の無事の成長など安産祈願の心性を石に託してきた。一方、墮胎・避妊の習俗から、「産まない」祈願も石に託してきたが、その際は石の呪術的な靈力よりも、石臼のようにその材質・重量によって石をもって跳び降りて墮胎したり、あるいは間引きの道具として石を用いるなど石の物理的・実用的な面が強調された。墮胎について言えば、『日本産育習俗資料集成』の資料を分析したところ、石を用いない墮胎の習俗は195件あったが、呪術的行為による方法は6件しかないことが明らかとなった。呪術的行為よりもむしろ、植物の茎を性器に挿入したり、水銀を飲む、高い所から跳び降りるなど、母体に危険な直接的な方法が採られたことが窺える。

このように墮胎や避妊などの「産まない」ことを遂行するなかで、ホオズキの茎を性器に入れたり、石を抱えて跳び降りたり、危険な方法で墮胎をせざるを得なかった当時の女性たちの性や生が、『日本産育習俗資料集成』などの、断片的ではあるが貴重な資料群の中から浮かび上がってきた。また間引きという嬰兒殺しを行うなかで、石を用いて子殺しをしたり、そこには、安産祈願のような石の呪術的な力を基にした習俗ではなく、石の重量や固さといった物理的な力を用いて、出生コントロールを行おうとした

女性たちの切実な願いがあったことが窺える。

近代社会に入っても、岩田が指摘する通り、墮胎をめぐる女性の生と性の現実には明らかに前近代的な残存であった⁹³⁾。また沢山は、墮胎・間引きや出産について、生命観や妊娠、出産観への新旧二種類の心性＝「マンタリテ」⁹⁴⁾が併存し、摩擦をおこしていた状況⁹⁵⁾の隙間で生きていた女性に注目する。本稿もまた、産育習俗の再検討を通して、石を用いる／石を用いない「出生コントロール」を行う女性たちの生と性に対する切実な願いと現実、そして産まない、産めない女性を「石女」と表現した当時の人々の差別的な眼差しに注目して分析を行った。石に託された「産む」ことを願う民俗の心性だけでなく、「産まない」ことを願う民俗の心性にも迫ることができたと言える。

本論文は2021年度サントリー文化財団・外国人若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（サントリーフェロシップ）を受けて完成したものです。

注

- 1) 新谷尚紀「境界の石—産石と枕石—」『日本民俗学』156号、1984年、6頁。
- 2) 新谷尚紀 同上論文、43頁。
- 3) 丸山久子「石のおかず」『人生儀礼』（講座日本の民俗3）有精堂、1978年、106-107頁。
- 4) 柳田国男『民間傳承論』（現代史学大系第7巻）共立社書店、1934年、259-290頁。
- 5) 太田素子『日本近世マビキ慣行史料集成』刀水書房、1997年、iii頁。
- 6) 太田素子、同上書、i頁。
- 7) 沢山美果子『出産と身体の近世』勁草書房、1998年、29-30頁。
- 8) 母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』第一法規出版、1975年、166頁。
- 9) 高橋梵仙『墮胎間引の研究』中央社会事業協会社会事業研究所、1936年。
- 10) 千葉徳爾、大津忠男『間引きと水子—子育てのフォークロア』農山漁村文化協会、1983年。
- 11) 松崎憲三「墮胎（中絶）・間引きに見る生命観

- と倫理観—その民俗文化史的考察—』『日本常民文化紀要』21、2000年、119-175頁。
- 12) 鈴木由利子「選択される生命—「育てようとする子ども」と「育てる意思のない子ども」—」『日本民俗学会』224号、2000年、34-66頁。
 - 13) 鈴木由利子「間引きと生命」『日本民俗学』232号（<特集>出産と生命）、2002年、3-18頁。
 - 14) 鈴木由利子『選択される命—子どもの誕生をめぐる民俗』臨川書店、2021年。
 - 15) 佐々木美智子『「産む性」と現代社会—お産環境をめぐる民俗学—』岩田書店、2016年。
 - 16) 森栗茂一『不思議谷の子供たち』新人物往来社、1995年。
 - 17) 例えば、高橋三郎編『水子供養：現代社会の不安と癒し』行路社、1999年；鈴木由利子「水子供養：胎児生命への視座」『出産の民俗学・文化人類学』勉誠出版、201年；ヘレン・ハーデカー著・猪瀬優理、前川健一訳『水子供養商品としての儀式：近代日本のジェンダー/セクシュアリティと宗教』明石書店、2017年。
 - 18) 安井眞奈美「思いがけないお産の民俗」『日本民俗学』303号、2020年、57-59頁。
 - 19) 落合恵美子「江戸時代の出産革命—日本版「性の歴史」のために」『変貌するフーコー倫理の系譜学へ<特集>』（『現代思想』第15巻）、1987年、131頁-141頁。
 - 20) 沢山美果子、注7) に同じ。
 - 21) 沢山美果子『墮胎・間引きと胎児観、「産む」身体観—津山城下町を中心に—』ユーラシア人口・家族史プロジェクト（EAP）、1996年、20頁。
 - 22) 太田素子、注6) に同じ、6頁。
 - 23) 青柳まちこ 一九八五「忌避された性」『家と女性—暮らしの文化史—』（日本民俗文化大系10）小学館、437頁。
 - 24) 萩野美穂『「家族計画」への道—近代日本の生殖をめぐる政治』岩波書店、2008年、28頁。
 - 25) 安井眞奈美「墮胎、避妊と近代産婆の登場」『出産・育児の近代—「奈良県風俗誌」を読む』法蔵館、2011年、63頁。
 - 26) 岩田重則『〈いのち〉をめぐる近代史』吉川弘文館、2009年、2頁。
 - 27) 岩田重則 同上書、2009年、1頁。
 - 28) 新谷尚紀 注2) に同じ、1頁。
 - 29) 柳田国男の『石神問答』（柳田 1941）を皮切りに、石の信仰や民俗と伝承などを本格的に研究対象とし、考古学や宗教学、歴史学などの多様な視点から研究が進められた。折口信夫は「石に出で入るもの」（折口 1932）において、石の信仰の要因を検討し、石は卵、瓢箪などのように「うつほ」（空っぽ）であり、「タマ」が宿ると提示した。そして、この説はその後の研究者に大きな影響を与えた。
- 野本寛一は石の民俗事例に注目し、『石の民俗』（野本 1975）と『石と日本人』（野本 1982）ではそれらの事例を考察した。中沢厚は四十年間石神の研究に携わり、『つぶて』（中沢 1981）と『石にやどるもの—甲斐の石神と石仏』（中沢 1988）を著した。また、大護八郎の『石神信仰』（大護 1977）や石上堅の『新・石の伝説』（石上 1989）、五来重の『石の宗教』（五来 1988）などの研究成果が見られる。
- 30) C・アウハント著、小松和彦・中沢新一他訳『鯨絵—民俗的想像力の世界』岩波書店、2013年、302頁。
 - 31) 倉石忠彦『道祖神伝承論・碑石形態論』岩田書院、2021年。
 - 32) 倉石忠彦、同上書、41-52頁。
 - 33) 倉石忠彦、同上書、51頁。
 - 34) 吉川宗明『岩石を信仰した日本人—石神・磐座・磐境・奇岩・巨石と呼ばれるもの—の研究—』遊タイム出版、2011年。
 - 35) 吉川宗明『古事記』『日本書紀』『風土記』は岩石をどう記したか—奈良時代以前の岩石信仰と祭祀遺跡研究に資するために—』『地質と文化』第5巻第1号、2022年、1頁—71頁。
 - 36) 丸山久子「石のおかず」『人生儀礼』（講座日本の民俗3）有精堂、1978年、106-119頁。
 - 37) 新谷尚紀、注28) に同じ、1-46頁。
 - 38) 飯島吉晴「子供の発見と児童遊戯の世界」『家と女性—暮らしの文化史—』（日本民俗文化大系10）小学館、1985年、253-255頁。
 - 39) 飯島吉晴「いのちの誕生と成長」『日本の民俗8 成長と人生』吉川弘文館、2009年、31-118頁。
 - 40) 八木透『日本の通過儀礼』（佛教大学鷹陵文化叢書4）思文閣出版、2001年、18-23頁。
 - 41) 桂又三郎『岡山縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』1936年、65頁。
 - 42) 母子愛育会編、注8) に同じ、31頁。
 - 43) 愛知縣教育會『愛知縣下妊娠出産育児に関する民俗資料』1936年、20頁。
 - 44) 愛知縣教育會、同上書、5頁。
 - 45) 愛知縣教育會、同上書、21頁。
 - 46) 新谷尚紀、注37) に同じ、43頁。
 - 47) 母子愛育会編、注42) に同じ、254頁。
 - 48) 桂又三郎、注41) に同じ、103頁。
 - 49) 母子愛育会編、注47) に同じ、162頁。

- 50) 母子愛育会編、同上書、165頁。
 51) 母子愛育会編、同上書、172頁。
 52) 安井眞奈美、注25) に同じ、66頁—71頁。
 53) 母子愛育会編、注51) に同じ、168頁。
 54) 母子愛育会編、同上書、168頁。
 55) 母子愛育会編、同上書、168頁。
 56) 母子愛育会編、同上書、168頁。
 57) 母子愛育会編、同上書、167頁。
 58) 三輪茂雄 『白』(ものと人間の文化史二十五) 法政大学出版局、1978年、293頁。
 59) 桂又三郎、注48) に同じ、78—82頁。
 60) 桂又三郎、同上書、81頁。
 61) 桂又三郎、同上書、82頁。
 62) 三上信夫『埋もれた母の記録:日本のチベット・北上山地に生きる』未来社、1965年、133—134頁。
 63) 三輪茂雄『ものと人間の文化史25・白』法政大学出版局、1978年、8頁。
 64) 母子愛育会編、注57) に同じ、162頁。
 65) 母子愛育会編、同上書、162頁。
 66) 佐々木喜善「ザシキワラシの話」『郷土趣味』郷土趣味社、1924年、5頁。
 67) 松崎憲三、注11) に同じ、141—142頁。
 68) 森正史監修「昔話」『あゆみ—忽那諸島の民俗』愛媛大学農学部付属農業高等学校郷土研究部、1968年、67—68頁。
 69) 宮城縣「神楽・舞踊 舞楽・延年」『宮城縣史 一九 民俗I』財団法人宮城縣史刊行会、1956年、310頁。
 70) 牧田茂「産神と箒神と」『民間伝承』民間伝承の会、1942年、10頁。
 71) 飯島吉晴「異物としての子供」『子供の民俗学 子供はどこから来たのか』新曜社、1991年、49頁。
 72) 三輪茂雄、注63) に同じ、293頁。
 73) 三輪茂雄、同上書、331頁。
 74) 久保秀史『日本の家族計画史』日本家族計画協会、1997年。
 75) 母子愛育会編、注65) に同じ、164頁。
 76) 母子愛育会編、同上書、171頁。
 77) 母子愛育会編、同上書、170頁。
 78) 母子愛育会編、同上書、171頁。
 79) 中沢厚『つぶて』(ものと人間の文化史44) 法政大学出版局、1981年、218頁、304頁。
 80) 常光徹『しぐさの民俗学—呪術的世界と心性—』ミネルヴァ書房、2006年、139頁。
 81) 桂又三郎、注61) に同じ、62頁。
 82) 浅野久枝「石女」『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館、1999年、182頁。
 83) 諸橋轍次 鎌田正 米山寅太郎『広漢和辞典 中巻』大修館書店、1991年、1352頁。
 84) 青柳まちこ、注22) に同じ、416頁。
 85) 西永兼康「生命の輝きの倫理学(三) 一生殖医療の倫理的課題—」『清泉女学院短期大学研究紀要』第23号、2004年、15頁。
 86) 山崎祐子「女の民俗誌」『男と女の民俗誌』(日本の民俗七) 吉川弘文堂、2008年、117—120頁。
 87) 母子愛育会編、注78) に同じ、173—177頁。
 88) 母子愛育会編、注84) に同じ、175頁。
 89) 母子愛育会編、同上書、175頁。
 90) 母子愛育会編、同上書、175頁。
 91) 母子愛育会編、同上書、21頁。
 92) 母子愛育会編、同上書、25頁。
 93) 岩田重則、注26) に同じ、2頁。
 94) 沢山美果子「『心性』から『マンタリテ』への言い換えには、集合的無意識のニュアンスが強い『心性』ではなく『世界観』として捉えたいという意図が組められている」沢山美果子『出産と身体の近世』勁草書房、1998年、34頁。
 95) 沢山美果子「近世末の状況は墮胎・間引きや出産について新旧二種類心性=「マンタリテ」が併存し、摩擦をおこしていた状況と捉えられる。略。この「新しいマンタリテ」は明治維新どころか大正期までかけて、ゆっくりと全国の村々にまで浸透していった」沢山美果子『出産と身体 of 近世』勁草書房、1998年、17—18頁。

2022年9月30日 受付

2022年12月7日 採択決定